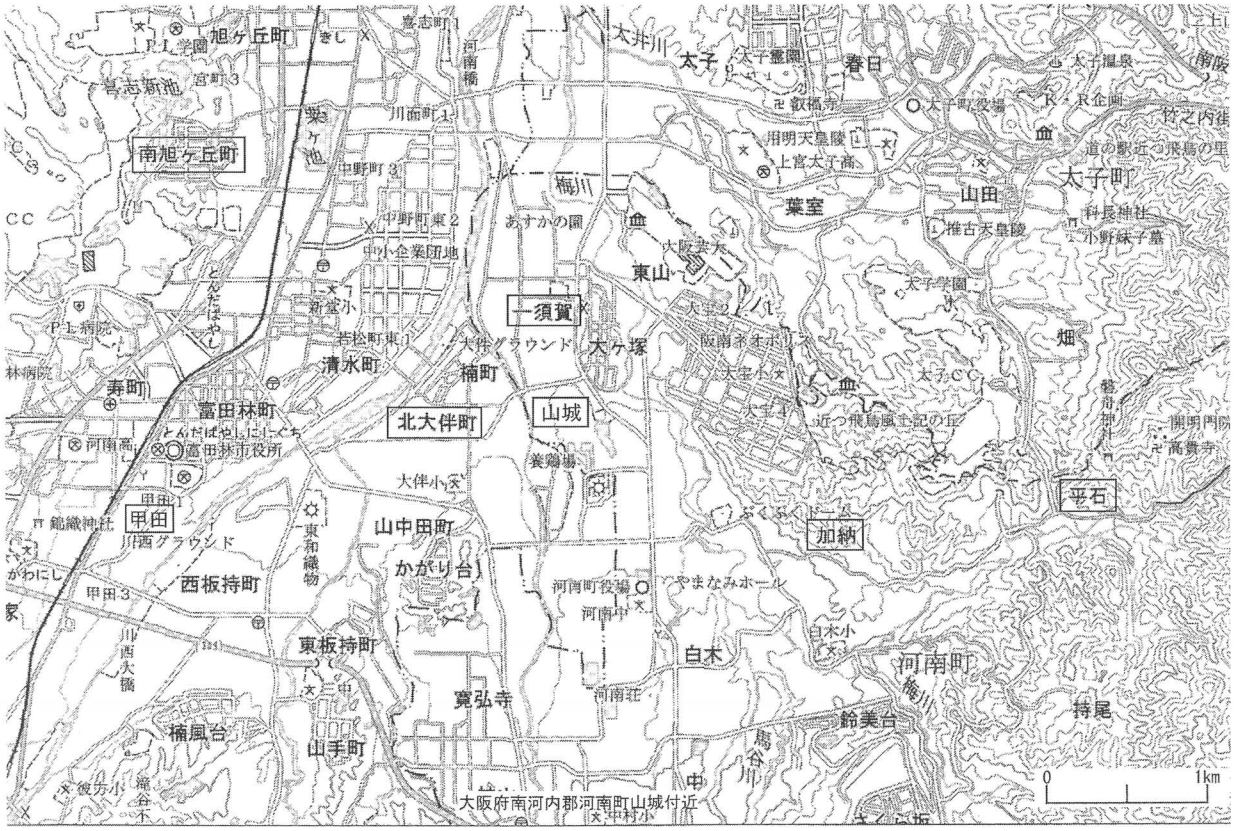
れたが、百済王は恩率・徳爾・余怒・奇奴知・参官・杙師徳率次千徳・水手等の人々を随伴者としてつけることになる。おそらく、これらは日羅の行動を監視するためのものと考えられる。その後、日羅一行は吉備の児島の屯倉に到着し、大王は大伴糠手子連を派遣して日羅らを慰労させる。さらに、日羅らは難波の館に赴くが、大王は再び大夫を派遣する。その時、日羅は甲冑をつけ、馬に乗って門前に着き、庁舎の前に跪いて次のように恨み嘆いた。「宣化大王の時、私たちの主君であった大伴金村大連が、国のためにと朝鮮に派遣した火葦北国造阿利斯登の子、達率日羅が大王の招きによって日本に帰ってきました。」といい、甲冑をぬいで大王にそれを奉献した。そこで大王は、日羅のために、館を阿斗桑市(八尾市跡部付近)に建ててそこに住まわせ、必要なもの一切を支給した。

また大王は、阿倍目臣・物部贄子連・大伴糠手子連を派遣して、国政について日羅に問う。日羅は答えて、「大王が天下のために行う政治は、人民を護り養うことが重要であります。俄かに軍兵を発して、民を失い滅ぼすのは得策ではありません。そのため、今国政をあずかる者は、朝廷に奉仕する臣・連・二つの造から、下は百姓にいたるまで、ことごとく富賑わい、物が足りないということが無きようすべきであります。三年の間、このようにして食料や武器を十分に用意し、民を喜んで奉仕させるようにすれば、民は水火をも厭わず、自ら進んで国難を救おうとすることでしょう。そうした後、数多くの船を造って港津毎に並べ置き、それらをみた蕃国人に恐れの心を抱かせ、その後有能な使者を百済に派遣して百済王をお召しなってください。もし、百済王が来ないようでしたら、大佐平(日本の大臣に相当)や王子らを召して来させるようになさっ



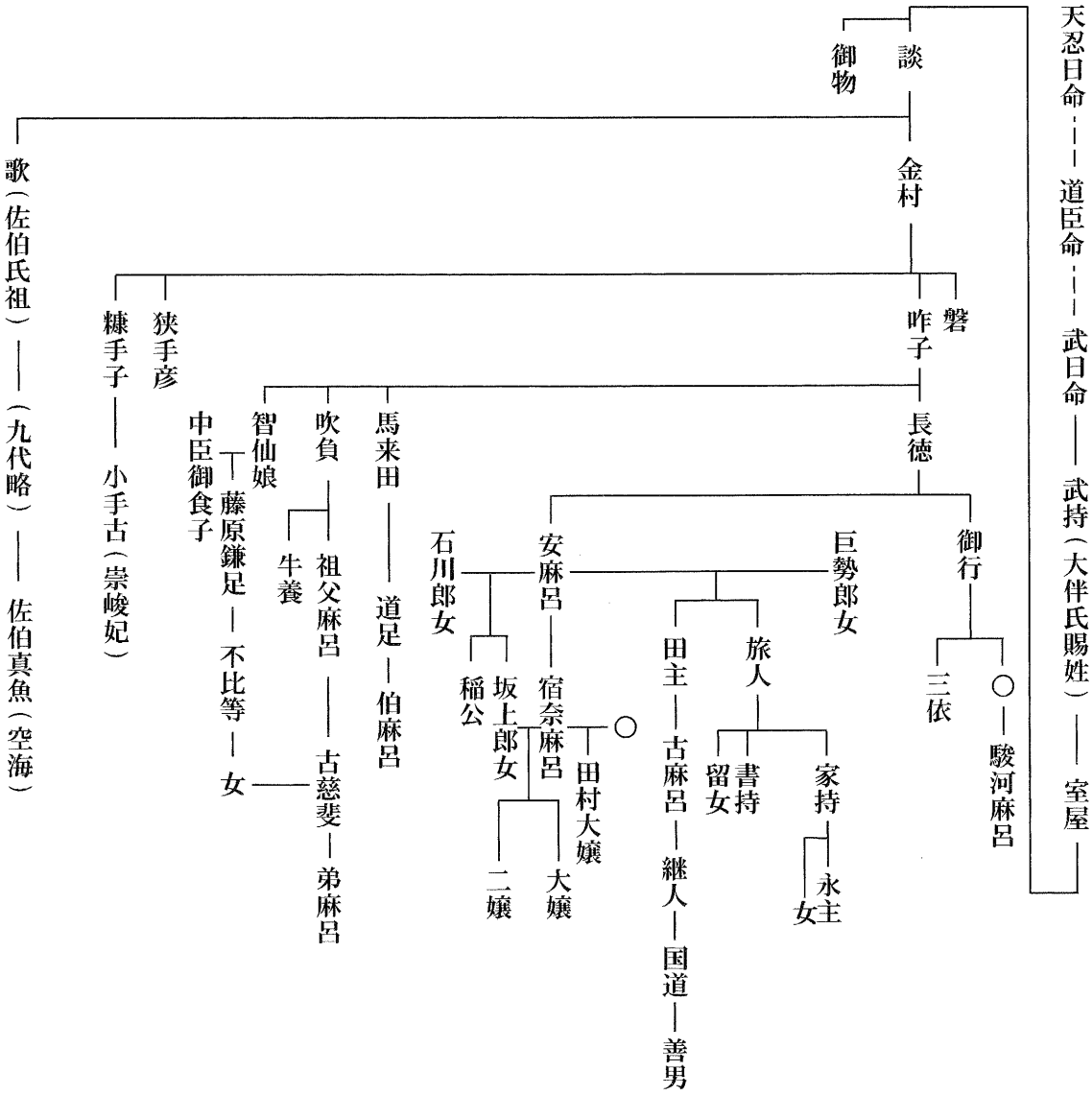
第230図 富田林市大伴などの位置図

てください。そうすれば自ずと、百済王が大王の命に服従する気持ちをおこすでしょうから、その後で罪（任那の旧地を新羅から奪って自領を拡大して、日本の任那復興に協力的ではない百済の罪）を問うのがよろしいでしょう。」と申し上げた。また、「百済の人々は、船三百艘をもって筑紫に領土を要求しようと企んでおります。もし、実際に要求してきましたら、わざと賜わるふりをしてください。百済が新しく国を作ろうとする時には、必ず女子供をのせてやってまいります。その時を狙って、壱岐・対馬に多くの伏兵を置いて、百済人を待ち構えて殺してしまうようになさいませ。逆に、欺かれるようなことがあってはなりません。要害の個所には、必ず堅固な塁塞を築かれますように」と申し上げた。恩率や参官は、百済に帰国にするにあたり、密かに徳爾らに「我々が筑紫を離れるところを見はからって、おまえらはこっそり日羅を殺せ。そうしたら、自分は王に詳しく事情を申し上げて、高い爵位を賜わるようにしてやろう。一身ばかりか、妻子までも後世にその栄誉が伝わることにしてやろう。」といった。徳爾・余怒らはこのことを承知した。参官らが血鹿（長崎県五島列島）に出発すると、日羅らは阿斗桑市村から難波の館に移った。徳爾らは、日夜、日羅殺害の機会をうかがったが、時に日羅の身は火焔のように光り輝いたので、恐れてこれを殺すことができなかった。しかしとうとう、十二月の晦に光が失われた機会を狙って殺害した。しかし、日羅は蘇生して、「これは自分の召使いの奴どもがやったことだ。新羅のやったことではない。」と言いつつ死んだ（この時、新羅の使いも難波に来ていたので、このようにいったのであろう）。大王は、贄子大連・糠手子連に詔して、日羅の遺体を難波小郡の西の丘の先端に収め葬らせ、その妻子や水夫らを石川に住まわせた。しかし、大伴糠手子連が大王に「一ヶ所に集めておくと、変事がおこる恐れがございます。」と建議したので、妻子を石川百済村（富田林市南旭ヶ丘町付近か）に、水夫を石川大伴村（富田林市北・南大伴）に住まわせることにし、さらに徳爾らを捕縛し、下百済河田村（富田林市甲田）に置き、幾人かの大夫を派遣して日羅殺害のことを問いただした。徳爾らはその罪を認めて、「そのとおりでございます。このことは恩率・参官が命令してさせたことで、私どもは部下としてそれに背くことができなかったのでございます。」と述べた。そこで、徳爾らを獄舎に下して大王に報告し、また使者を葦北に派遣して日羅の同族をみな召集し、徳爾らを賜わって思いのままに処罰させた。葦北君らは、徳爾らの身柄を受け取ってみな殺し、弥売島（大阪市西淀川区姫島）に捨てた。それから、日羅を葦北に移葬した。後に海辺の人の話では、「恩率の船は風にあって海に沈み、参官の船は対馬に漂着した後、やっと帰ることができた」とのことであった。

要するに、火葦北国造の子であった日羅が百済で高官になり、敏達大王に請われて日本に来るのだが、百済人の随伴者に暗殺される。その時、大伴糠手子連が日羅の妻子や水夫を石川百済村（富田林市新堂・緑ヶ丘付近か）と石川大伴村（富田林市北・南大伴）に置いて、捕縛した百済人らを下百済河田村（富田林市甲田か）に置くという内容である。これなども、三ヶ所の村が大伴氏の勢力範囲であることを如実に示している。さらに、この時大伴糠手子連が敏達大王の側近であり、大夫であったこともわかる。

次に用明二年 (587)、大伴連咋子は蘇我馬子による物部守屋討伐軍に参加し、ここに物部本宗家は滅びる。また崇峻元年 (588) に、大伴連糠手子の娘小手古は崇峻の妃になっている。崇峻四年 (591)、咋子は任那再興のために筑紫に派遣されるが、崇峻大王の暗殺により中止されることになる。さらに推古九年 (601)、咋子は任那救援のため、高句麗討伐に派遣される。

さて、金村の子であった磐・狭手彦・糠手子・咋子と、咋子の長子長徳が平石古墳群の被葬者の候補になろう。彼らの『日本書紀』に見える登載順位は、磐、狭手彦、糠手子、咋子、長徳であり、それらは長幼を表しているように思える。そのうち磐は、宣化二年 (537) に記事がみえるだけであり、その被葬者としては高齢すぎる。そういった意味で除外されるべきであろう。そうなれば、四人の被葬者は狭手彦、糠手子、咋子、長徳に絞られることになる。特に、咋子の長子であった長徳は、孝徳大王の大化五年 (649) に当時最高位であった右大臣まで登りつめ、約百年ぶりに大伴氏の復権を果たした。白雉二年 (651)、長徳の死にあたって孝徳大王はいたく嘆き悲



第231図 大伴氏系図

しんだという。四人の中で唯一死亡年が知られるのは長徳だけであり、もしかすると平石古墳群最後の首長墓であるツカマリ古墳の被葬者に相当するかもしれない。その墓は孝徳陵に近い。その後の斉明朝や天智朝の約二十年間に大伴氏の記事は全くみえない。これは、長徳以降大伴氏の勢力が失墜したか、冷遇されたかのどちらかであろう。それは、親孝徳派であったため、中大兄皇子から政治の中枢から外された可能性もあろう。そして、大伴氏が再び復活を果たすのは、壬申の乱 (672) の時である。長徳の弟であった馬來田と吹負が大海人皇子軍として、飛鳥古京の争奪に参戦し、吹負は将軍として大活躍する。その争奪戦に大海人皇子軍は勝利し、ついに近江軍を駆逐する。すぐさま大海人皇子は天武天皇として即位することになる。なお、馬來田と吹負は壬申の功臣として名を成すが、二人は天武一二年 (683) に亡くなり、天武天皇から馬來田は大紫、吹負は大錦中の位を贈られる。ただ、この二人は平石古墳群の被葬者には年代的に該当しないであろう。

大伴家持の「大伴の遠つ遠祖の奥つ城は著く標立て人の知るべく」『万葉集』巻一八は、家持が平石古墳群の情景を詠んだものかもしれない。

ところで、石川と千早川の合流点付近に：富田林市北大伴・南大伴の集落があるが、近世以前は石川郡大伴村としてかなり広い領域を占めていた。その北大伴の東に接して河南町山城の集落がある。その集落に近接した小高い台地上には、南から北に向かって段々に下降する広い田が続いている。その中の大きな楠の下に降幡神社の古社がある。降幡神社は、明治時代に近くの壱須賀神社に合祀され今は何の建築物もみられないが、かつてはこの地にあったという。その周辺の田畑からは、過去開墾のたびに古瓦や土器が出土し、地元の好事家によって収集されていた。さらに、ここ二十数年の間にも、柱座を刳り出した花崗岩製の礎石が二石出土しており、伽藍配置などは全くわからないにもかかわらず、白鳳寺院の存在が想定できる。この地は街道沿いにもあたっており、北へ二キロも行けば竹内街道にいたる。また舟運にしても、すぐ西側に千早川が流れ、石川を下って容易に大和川にも出ることができた。そういった交通の便にも優れた土地であった。何時からこの地に降幡神社があったかはわからないが、四座の祭神の中に天忍日命が含まれている。天忍日命といえば、大伴氏の祖神であり、山城の地もまた大伴氏の勢力範囲に入っていたものと考えられる。当時このような寺院を建立できた氏族は、山代氏 (奈良時代の山代忌寸真作で従六位) などの渡来系氏族などではなく、古代からの雄族大伴氏 (奈良時代では正三位) ではなかったか。白鳳期といえば、丁度大伴長徳や馬來田・吹負らが活躍した時代にもあたっている。この寺院がいつまで命脈を保ったかは明確ではないが、平安時代前期には廃れていたものと考えられる。このことは、大納言伴善男が、藤原良房の謀略により応天門の変で失脚し、その結果大伴氏が急速に衰えていくことと関係しているのかもしれない。

参考文献

黒板勝美編『公卿補任　第一篇』国史大系 53 吉川弘文館　1964

奈良県教育委員会『烏土塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 27 冊　1972

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野　晋『日本書紀 下』岩波書店　1976

奈良県教育委員会『竜田御坊山古墳　付平野塚穴山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 32 冊　1978

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館『飛鳥時代の古墳』1981

上野勝己『王陵の谷・磯長谷古墳群―太子町の古墳墓―』1984

大阪府教育委員会『寛弘寺古墳群発掘調査概要・Ⅵ』1987

井上光貞監訳『日本書紀 下』中央公論社　1987

広陵町教育委員会『史跡　牧野古墳』1987

大阪府教育委員会『南河内遺跡群発掘調査概要・Ⅰ』1988

大阪府教育委員会『寛弘寺古墳群発掘調査概要・Ⅷ』1989

河南町教育委員会『史跡 金山古墳発掘調査概要』1994

河上邦彦『後・終末期古墳の研究』雄山閣　1995

斑鳩町・斑鳩町教育委員会『斑鳩　藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』1995

佐竹昭広・山田英雄・大谷雅夫・山崎福之・工藤力男　校注『萬葉集』一　岩波書店　1999

白石太一郎『古墳と古墳群の研究』塙書房　2000

大阪府教育委員会『加納・平石古墳群発掘調査概要』2002

『二上山麓の終末期古墳と古代寺院―平野古墳群と尼寺廃寺跡―』香芝市二上山博物館図録 18　2002

加藤謙吉『大和の豪族と渡来人－葛城・蘇我氏と大伴・物部氏』吉川弘文館　2002

大阪府教育委員会『加納・平石古墳群発掘調査概要・Ⅱ』2003

上林史郎「河内」『終末期古墳とその時代』季刊考古学 82 号　2003

前園実知雄「飛鳥の終末期古墳の被葬者像」『考古学に歴史を読む』同志社大学歴史資料館 2003

佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之　校注『萬葉集』四　岩波書店　2003

大阪府教育委員会『加納・平石古墳群発掘調査概要・Ⅲ』2004

『古墳から奈良時代墳墓へ―古代律令国家の墓制―』大阪府立近つ飛鳥博物館図録 34　2004

『今来才伎―古墳・飛鳥の渡来人―』大阪府立近つ飛鳥博物館図録 36　2004

大阪府教育委員会『加納・平石古墳群発掘調査概要・Ⅳ』2005

大阪府教育委員会『加納・平石古墳群発掘調査概要・Ⅴ』2006

報　告　書　抄　録

ふりがな	かのうこふんぐん・ひらいしこふんぐん
書名	加納古墳群・平石古墳群
副書名	府営中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	枡本 哲他
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前2丁目　TEL　06-6941-0351
発行年月日	平成21年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
かのうこふんぐん・ 加納古墳群・ ひらいしこふんぐん 平石古墳群	みなみかわちぐん 南河内郡 かなん　ちょう 河南町 かのう 加納・ ひらいし 平石	27382	37・24	34° 29′ 20″	135° 39′ 09″	2000年 9月～ 2005年 3月31日	25,842㎡	中山間地域 総合整備事業 「南河内 こごせ地 区」に伴う 発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
加納古墳群・ 平石古墳群	古墳時代	古墳時代	・横穴式石室を主体部とする円墳 ・横口式石槨を主体部とする飛鳥時代の方墳	須恵器・土師器・瓦器・装身具・大刀・刀子・挂甲小札・馬具・漆塗籠棺・緑釉陶製棺台・榛原石	・6世紀後半～7世紀代の横穴式石室を主体部とする円墳および横口式石槨を主体部とする大型の方墳

要　約	平成12年より平成16年度にかけて、6世紀後半から7世紀前半にかけて築造された古墳時代後期から終末期の円墳4基、方墳4基が調査された。本書には調査によって得られた古墳の規模・構造・副葬品の内容など述べられている。

加納古墳群・平石古墳群

-府営中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う発掘調査-

発　行　　大阪府教育委員会
〒540-8571
大阪市中央区大手前2丁目
TEL 06-6941-0351（代表）
発行日　　平成21年3月31日
印　刷　　株式会社　中島弘文堂印刷所
〒537-0002
大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL 06-6976-8761（代表）